令和元年度徳島県教育行政点検・評価委員会　議事概要

（開催要領）
１　開催日時　令和元年８月８日（木）午後１時３０分から午後３時まで
２　場　　所　県庁９階　教育委員室
３　出席者
【委員】５名全員出席
奥村英樹会長，上野ひとみ委員，佐野勝代委員，東條貴司委員，三隅友子委員
【県】美馬教育長，東條副教育長，儀宝教育次長，竹内教育次長　他

（会議次第）
１　開　会
２　教育長あいさつ
３　委員及び事務局職員紹介
４　議　事
（１）教育委員会の点検・評価（案）の説明
（２）質疑及び意見交換
５ 閉　会

（議事内容）
（委員）
ただいま，事務局から説明がありました。事務局からの説明に対しての御質問でも結構ですし，資料の各項目に対する御意見，御提言なども含めまして，御発言いただければと思います。

（委員）
「全国学力・学習状況調査」や「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果について，全国平均が上昇している中で，順位が上がらないのは仕方のない部分もある。徳島県として努力をしており改善が見られるのであれば，点数や順位が低いということを取り立てて言う必要はないのではないか。それよりも，こういう成果が出てきているという部分をもっと現場の先生方に理解してもらえるよう発信をしていくべき。
オリンピックという機運を使って，スポーツに関心のない子どもや周りの人を引っ張っていけるようにはしなければいけない。

（委員）
相対評価ではなく，絶対評価も必要ではないか。現場の先生方が成果を実感できるような成果指標も必要ではないか。

（事務局）

平成２７年度から「とくしま確かな学力育成プロジェクト」に取り組み，年々，改善も図られている。平成２９年度から小学校，中学校ともに主として活用に関する，いわゆる国語のＢ問題を除いては，全国平均を上回るということで，基礎基本の定着には成果が見られるが，活用問題には課題が見られる。

平成３０年度においては，中学校の国語Ｂ問題で全国平均を下回ったが，知識に関するＡ問題，数学のＡ問題，Ｂ問題，３年に一度，実施される理科については全国平均を上回っている。残念ながら，小学校においてすべての教科で全国平均を下回った。

今年度についても，すでに新聞等で報道されているが，Ａ問題とＢ問題が一体となって出題されたということで，活用に関する問題については課題があると認識している。

現在は「とくしま未来の学び創造プロジェクト」として，鳴門教育大学とも連携し，調査結果を分析して，課題を明らかにすることで，児童生徒の確かな学力の育成に向けて，県教委としても各校の取組をサポートしている。その中で，伸びたところ，良いところも含めて，適切にお伝えしていくために，現在，各学校に分析をお願いしているところ。その中で，学校として，よかったところは何か，どんなところが伸びたか，などについても調査項目に加えている。委員のご意見を踏まえ，次年度の評価に生かしていきたい。

（委員）

部局や所管課を超えた取組も多いようであるが，各取組において，どこが関わっているのかが見えてくるともっとわかりやすくなるのではないか。とくに，これだけの取組をしているが，保護者にどれだけわかってもらえているのか。われわれも子どもたちのキャリア形成において，家庭教育が重要であることは申し上げているが，すべての人にわかってもらえていないように思う。ＰＴＡ活動や参観日を通じて，こういった取組があることを知ってもらうのも私たちの使命と考えている。ＰＴＡに携わっている人たちだけががんばっているのではなく，保護者全体が家庭教育の充実に向けてがんばっているという意識を醸成していくことが必要。保護者にもわかりやすく情報提供ができる場を設けることが必要ではないか。ホームページ等を使って，わかりやすい言葉で，発信してほしい。とくにキャリア教育などについても，保護者にわかりやすく広報してもらいたい。

（事務局）

徳島県では平成２８年に徳島県家庭教育支援条例が制定され，それに基づいて様々な事業を展開している。とくに，機運を醸成する取組として，「とくしま家庭教育のつどい」を実施しており，関係機関とも連携しながら，研修会や講習会，ワークショップを開催している。そういった機会を通じて機運醸成を図っているが，効果的なＰＲや広報についてもしっかり行ってまいりたい。

（委員）

「とくしま家庭教育のつどい」にはどれくらいの人が参加したのか。

（事務局）
昨年度で約３５０名の方々にご参加いただいた。

（事務局）
保護者の方々には広報紙「教育通信ふれあいひろば」を７月，１０月，２月の年３回，発行している。各種事業の取組や親子で参加できる行事などを掲載し，周知を図っている。

（事務局）
ふれあいひろばには，学力の分析や新たに開校する学校，キャリア教育や特別支援教育，さまざまな分野について年３回ではあるが，掲載している。子どもを通じて，すべてのご家庭に配付しているが，なかなか親の手元まで届かないという課題もある。学校の方にも工夫していただいて，しっかり届くようにしたい。われわれとしても，保護者やＰＴＡの方々に知っていただきたい，活用できる情報を満載してお送りしているので，活用をしていただく努力をしていく。ホームページ等でわかりやすく発信してほしいというご意見をいただいたが，できるだけわかりやすく，そして見やすく，欲しい情報を提供できるようにしっかり考えてまいりたい。

（委員）
達成率が８０％未満の事業について伺いたい。例えば，全国高等学校総合体育大会等の入賞数など，目標値の設定については，生徒数に占める割合であるとか，何か基準はあるのか。また，全国的に捉えて，それは妥当なのか。徳島県は人口減少も顕著なので，目標値に実数を掲げているものの中には，ハードルが高く，達成が難しいようなものはないのか。その辺について教えてもらいたい。

（事務局）
全国高等学校総合体育大会等の指標については，インターハイだけではなく，同等レベルの大会も加え，４大会を一つの指標としている。入賞を一つの目標とはしているが，入賞しなくともベスト１６やそれ以下についても，ここに掲げている。数値の達成だけではなく，そこに向かう過程も非常に重要であると考えており，その両面の把握に努めているところである。

（委員）
対象とする生徒数から目標値を設定しているということでよいか。ある程度，入賞するという数字を想定して設定しているということか。

（事務局）
スポーツによって個人競技と団体競技がある。例えば，陸上の１００ｍで入賞すれば個人として１，バレーボールで３位に入れば，団体として１のように，個人競技と団体競技でそれぞれカウントして，その合計値として目標値を設定している。

（委員）
個人と団体で，各スポーツにおいて積み上げ式にカウントするということでよいか。

（事務局）
目標値が適切なのかということについて，平成２９年の基準値があるが，その後，トップスポーツ育成事業において有力選手の強化に努めてきた。とくに選手の県外流出が言われる中，できるだけ徳島県の選手は徳島県で育成したいという思いもあり，目標設定をしている。年色もあり，毎年，達成していくのは難しい面はあるが，基準に照らしても，妥当な数字であるとは考えている。

（委員）
全国中学校体育大会の入賞数についてであるが，取組状況にある中学校のトップスポーツの指定競技に卓球が入っていない。長い目で捉えると，卓球は一生取り組める魅力的なスポーツである。徳島県は中学校のレベルは全国的にも高いのではないか。国際的にも日本が強くなってきており，子どもたちの体力向上のためにもよいスポーツだと思うが，入っていない理由は何か。

（事務局）
中学校体育連盟の各専門部を支援するものであるが，成績を残していることが条件となっている。選定委員会の中で選定されることが必要であり，今後，成績を残して申請があれば，指定されることもあると考えている。

（委員）
競技力の向上のためには，世界で活躍された方々からも力をお借りするのも大切ではないか。

（事務局）
柔道をはじめ，活躍された方はいるので，今後，そういった方々を学校現場にお迎えして，いろんな形で交流，指導していただく場面は設定していく予定である。

（委員）
部活動の中には，指導者がいないこともあるようである。協会等とも連携して，シニアの活用をはじめ，組織的に連携して，モデルケースの構築を図るなど，そういった仕組みづくりが必要ではないか。

（事務局）
地域の人材を活用する運動部活動指導員の制度がある。教員の負担軽減と部活動の質的向上を図るために本年度は２２名を任用予定としている。高校においては，競技団体やクラブチームと連携して，競技力の向上を図っているところもある。新体操や水泳等はそれによって成果も上がっている。

（委員）
「社会への扉」を活用していただいているようであるが，契約の問題など，大人がやっても難しいところがある。全国的に広がっていけばいいと思うが，成年年齢の引下げを踏まえて，選挙の重要性について学ぶ主権者教育についても，もっと取り組んでいかなければいけないのではないか。

（事務局）
国から副読本として，全生徒を対象に「私たちが拓く日本の未来」という教材が配付されており，それを活用した授業等を行っている。本県独自にハンドブックも作成しており，高校１年生全員に配付し，授業等で活用している。ラインを使って期日前投票や不在者投票の周知や広報も行っている。

（委員）
インターンシップについて，企業側からするとインターンシップ生を指導する側の勉強と捉えているのが現状である。学校側からの要望が非常に少なく，任されている状況もある。企業として徳島県にこういう人が育てばいいなという視点で指導することもあるが，ただ楽しんでもらえばというときもあり，迷うことがある。企業にとっても生徒にとっても貴重な機会のなので，踏み込んだカリキュラムのようなものはないのか。

（事務局）
実施の手引きを作成して，学校・企業に配付し，参考にしてもらうようにしている。学校によってはセルフインターンシップとして，生徒個人が目標を持って，インターンシップに参加するようなところもある。機会を捉えて，そういった指導もしっかりと行ってまいりたい。

（委員）
社会について学んでいただく重要な機会なので，企業側も受け入れる際に，先生方と共通理解を図りながら，中身をより充実させていくように努めていかなければいけない。

（事務局）
学校によってインターンシップの捉え方が違う。就職を考えている専門高校の生徒，大学卒業後に就職する普通科高校の生徒では考え方は違う。共通して言えるのは，「とくしま回帰」ということで，それを促進していきたいということ。政治経済，文化など徳島のことについてもっと知ってもらう。また，インターンシップを通じて，その会社のやりがいや仕事の魅力について教えてもらう必要がある。必ずためになるものであるので，今後とも御協力いただきたい。

（委員）
情報活用能力の育成やプログラミング教育の推進など，Society5.0をリードする人材の育成や新学習指導要領を見据えた取組がされている。国においては，ＡＩ人材の育成やＡＩリテラシーの育成など多岐にわたって行われているが,徳島県としてこの分野において,将来的にどのようなビジョンを持って，計画に位置付けられているのか。

（事務局）
情報モラル教育やプログラミング教育の年間指導計画の作成など，時代の変化に対応できる人材の育成に取り組んでいる。

（事務局）
中学校の技術家庭のなかで情報教育について取り組んできた。コンピュータの操作やリテラシーについて学習してきたが，現在ではプログラミングに近い学習にも取り組んでいる。発達段階に応じた教育を行う必要があるので，小学校のプログラミング教育に対応するため，総合教育センターに指導主事を配置した。今年度は推進員を中心に研修も行っており，年間計画の作成等，来年度の実施に向けて準備をしている。高校の情報については，今年度から新たに教員採用試験で新たに情報専門の教員を加えて，専門性の高い人材の確保と育成に努めているところである。

（委員）
最近の大学生を見ていても思うが，個々の能力を伸ばすことについてはいっしょうけんめいにするが，その能力をどう使うかという発想に欠けている。一人が努力したら皆が豊かになるということはない。スポーツができる，語学力があるなど，それぞれ個人差はあってもよいもの。それぞれがつながることによって，何を生み出せるかという視点に立ち，話し合いをしたり，グループワークをしたりする。それぞれが力を合わせることで，社会で何ができるか，という視点を持たせることが大切で，これまでの教育にそういう視点が欠けていたのではないか。自分の学んでいることが，将来どのように生きていくのかを見せることが，早い段階から必要ではないか。試験があるからとか，何番を目指すとか，そういったことは目標ではない。例えば，日本の学校とドイツの学校が提携してつながっていくためには，語学が必要であるとか，みんなでつながるために語学が必要であるとか，点数ではない別の目標も含めて，両方視野に入れて取り組んでいかないといけない。つながるというのは一つのキーワードではないか。多様性の中で活躍していくという発想が必要である。

（委員）
試験や点数ではない，社会的価値で測るような指標も必要である。

（事務局）
高校生の英語力が目標未達成であるが，原因としては，英語がまだ大学受験の一つの手段として捉えられていて，大学に進学しない生徒にとってはあまり必要ないもの，そして，そもそも周りに英語を使う機会がないということが考えられる。英語が将来を見据えて，必ず必要なものであり，その最低限の力が英検の準２級程度に合致するような能力であるということを，生徒たちにわかってもらうことが大切であり，それがないと県全体の英語力向上にもつながらないし，グローバル人財の育成にはつながらない。何ができるようになったのか，何のために何をするのかという観点からの英語教育に，新学習指導要領も踏まえ，取り組んでいきたい。

（委員）
英語を使う機会は積極的に作ってもらいたい。ＳＮＳでつながる機会もあるので，姉妹校の生徒同士で英語でチャットで話すなど，そういった機会を組み込んでいけばどうか。

（事務局）
項目別に評価するためこういう形にはなるが，達成するために学校で何かをするときに，点数を上げるためというのではなく，アクティブ・ラーニングなどの授業で，協働で合意形成を図ることを目的としながら，その過程で国語力が伸びたりするのが理想。何らかの形で学校の方にも下ろして，目標設定の在り方については我々も研究していく。

（委員）
徳島県は他県に比べると電子黒板も普及しており，取組は進んでいる。今後，教員の負担軽減のためにも，ＩＣＴ支援員の配置等が重要になってくるが，それについての考えはどうか。

（事務局）
専門性の高い支援員の配置は重要であり，しっかり検討していく。

（事務局）
現状はＩＣＴの担当教員に研修を行い，学校の中で核となって活動していただいている。働き方改革の視点からも大切であるが，人材の確保と予算も含めて，他県とも情報共有しながら，国への要望も検討していく。

（委員）
補足になるが，キャリア教育という言葉をわかりやすい表現にしてほしい。保護者がわかっていないところがある。子どもたちの職業観を醸成していくためにも，保護者向けに広報が必要である。

（委員）
　エシカルとは，「相手を思いやる気持ち」ということと考えている。エシカル消費については，フェアトレードなど，少なからず経済的な裏付けが必要であり，どうしても安価な商品に流れることもある。エシカル消費については，どのような見解を持っているか。

（事務局）
　全高校にエシカルクラブを設置し，学校の特色に応じて，できることをやっている。服の再利用，食品ロスを抑えた調理，研究活動などさまざまな取組を文化祭やホームページ等を通じて県内外に発信している。そうした取組のなかで，それぞれがエシカル消費について考えている。

（委員）
　海外との交流に関連して，最近は留学生の受入れに際して，ホストファミリーが見つかりにくいという話を聞く。中小企業も留学生をそのまま雇用するということが増えているので，事業の周知においては，幅広く行った方がよいのではないか。協力していただける企業もあると思われる。

（委員）
　評価の仕方について，１００％を目標にしていて，すでに１００％を達成しているものもある。各事業で先生方をはじめ，多くの方に努力をしていただいているので，何か成果が見えるような評価を検討してはどうか。

（委員）
　本日は，委員の皆様から様々な観点でご発言をいただき，また，事務局の皆様には真摯なご回答をいただき，たいへんありがとうございました。今後の教育行政の推進にできる限り反映していただければと思います。
　また，近々，新しい教育大綱ができるということで，それに合わせた改善も検討していただきたいと思います。ご協力ありがとうございました。